

## 幼児教育における今日的課題と豊かな遊びを育む保育実践 —岩手大学教育学部附属幼稚園における園内研究から—

下山 恵・高橋 文子・北條 早織・千葉 紅子・渡邊 奈穂子・石川 幸子・小川 恵美子\*,  
阿部 裕之\*\*, 佐々木 全\*\*\*

(2017年3月3日受付)

(2017年3月6日受理)

Kei SHIMOYAMA, Ayako TAKAHASHI, Saori HOJO, Kouko CHIBA, Naoko WATANABE,  
Sachiko ISHIKAWA, Emiko OGAWA, Hiroyuki ABE, Zen SASAKI

Today's Problems in Early Childhood Education and Childcare Practice that Encourages Fulfilling Play :  
Based on Research Conducted at the Iwate University of Education a Hached Kindergarten

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培うとともに、学習の基盤を形成する重要なものである。平成27年度から「子ども・子育て支援新制度」が実施されたことにより、幼稚園等の施設を通して、全ての子どもが健やかに成長するよう、質の高い幼児教育を提供することが求められている。

本稿ではこのような幼児教育における今日的な動向についての実践的な対応を、岩手大学教育学部附属幼稚園における実践を通じて論説する。本園では、遊びを中心とした保育の中で一人一人の自己形成を支えとともに、学びの基盤となる遊びの充実を目指してきた。確かな幼児理解に基づき、豊かな遊びを育てることこそが、生涯にわたる学びの基盤をつくるものであり質の高い幼児教育である。この理念を具現化するための保育の計画、保育の評価の実際を報告する。併せて、園内研究の一環である保育カンファレンスの実際を報告した。

### 第1章 幼児教育の理念と今日的課題

現行の幼稚園教育要領では「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」とされ、学校教育法第22条に規定する幼稚園教育の目的を達成するために「幼児期の発達特性を踏まえ、環境を通して行うことを基本とする」ことが示されている<sup>1)</sup>。また、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」と位置づけ、遊びを中心とした生活の中で、幼児一人一人の特性や発達に応じ

た指導を行うこととされている。その上で、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などが、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域の視点からねらいや内容として整理され、それらは、幼稚園生活の全体を通じ、具体的な活動を通して総合的に指導されるものとして示されている<sup>2)</sup>。

現在、次期幼稚園教育要領の改訂に向けて作業が進められているところであるが、その審議のまとめの中に「近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認

\* 岩手大学教育学部附属幼稚園, \*\* 岩手大学人文社会科学部, \*\*\* 岩手大学大学院教育学研究科

知的能力といったものを幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究成果をはじめ、幼児期における語彙数、多様な運動経験などがその後の学力、運動能力に大きな影響を与えるという調査結果などから、「幼児教育の重要性への認識が高まっている」とあるように、幼児期は非認知的能力が発達しやすい時期であることが確認され、就学前教育の重要性に注目が集まっている<sup>3)</sup>。これまでの幼稚園教育で重視し育成してきた心情・意欲・態度は、まさに近年注目が集まっている非認知能力であるといえよう。

その上で、平成27年度から「子ども・子育て支援新制度」が実施され、幼稚園等を通じて全ての子どもが健やかに成長するよう、質の高い幼児教育を提供することが一層求められてきている<sup>4)</sup>。このため、幼稚園のみならず、保育所、認定こども園を含めた全ての施設全体の質の向上を図っていくことが必要である。環境による教育の一層の理解とそれに基づく確かな実践により、一人一人の子どもの生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などを育み、遊びを通しての学びを実現していくことが求められている。

また、幼小の接続の課題等から、次期学習指導要領・幼稚園教育要領の改訂にあたっては、幼児教育と小学校以降の教育を貫く柱として、育みたい3つの資質・能力として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」が明確化された。これら3つの資質・能力と、これまで幼稚園教育要領で示されてきた5領域の内容を踏まえ、幼児期の終わり（5歳児修了時）までに育ってほしい具体的な姿として、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活とのかかわり」「思考力の芽生え」「自然とのかかわり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10項目が示された<sup>5)</sup>。この10項目を幼稚園等と小学校の教員が共有することにより、幼小接続の強化につながる事が期待されている。それに伴い、これまでの幼児教育

では、幼児一人一人のよさや可能性を評価してきたが、5歳児については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた視点を加えることになる。ただし、その際には他児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定でとらえるものではないことに十分留意することが重要である。

本稿では、以上のような幼児教育における今日的な動向についての実践的な対応について、岩手大学教育学部附属幼稚園（以下、本園と記す）における実践を通じて論説する。

## 第2章 幼児教育における今日的な動向についての実践的対応

### 1 岩手大学教育学部附属幼稚園における実践理念

人格形成の基礎を培い、生きる力の基礎を育成する幼児期に最も大切にされなければならないことは、一人一人がその子らしい自分をつくっていくことであるという理念に基づき、本園では、遊びを中心とした生活の中で一人一人の「自分づくりを支える」を保育の基本とし、実践に取り組んでいる。

そのために教師は、幼児自ら環境とのかかわり、環境とのかかわりの中で、自己の世界を広げたり、深めたりして、幼児自身が主体となって生きられるような生活を保障するとともに、一人一人の幼児への深い理解やその子らしい自分をつくっていく過程に寄り添った環境や援助に努めている。

また、幼稚園教育要領においては「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」とされる<sup>6)</sup>。幼児は興味関心をもつと、自ら環境にかかわって遊びを生み出していく。その遊びに面白さを感じると、夢中になって遊び、繰り返し楽しむようになる。さらに、より面白くするために、ものを取り込んだり工夫したりする中で、ものとのかかわりが深まったり、仲間のかかわりによって、より楽しさが増したりするなど、遊びへの興味関心が高まり、

「もっとこうしたい」という次への意欲につながっていく。このように幼児は、多様な“人・もの・こと”とかがわって自ら遊びを生み出し、充実感や満足感を味わう中で、人やものごとへの認識を深めたり、関係を広げたりしながら、学びを深めていく。

ここで留意すべきこととして幼稚園教育要領においては「幼児が様々な人やものとのかかわりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること」である<sup>7)</sup>。それは、数多くの活動をさせることでも、次々と活動を提供することでもない。幼稚園教育要領解説にあるように「幼児が自分で考え、判断し、納得し、行動することを通して生きる力の基礎を身に付けていくためには、むしろ幼児の活動は精選されなければならない。その際特に重要なことは、体験の質である。あることを体験することにより、それが幼児自身の内面の成長につながっていくことこそが大切」なのである<sup>8)</sup>。

このことを踏まえ本園では、子ども自身がこれまでの体験を基にしながら、体験をつなげ、主体的に遊びを展開し、遊びの充実感を味わいながら、学びを深めていけるよう努めている。そのために教師に求められているのは、遊びの中での幼児一人一人の体験に目を向け、その子にとっての「体験の意味」を捉えるとともに、幼児の内面の成長につながっていくような適切な環境や援助の方策を見出していくことである。生涯にわたる学びの基盤を確かなものにしていくためにも、体験のつながりの先を見据えた環境の構成や援助の可能性を具体的に構想しながら、豊かな遊びを育みたいと考えている。

## 2 教育課程編成の実際

本園における教育の基本は、「自分づくりを支える」である。それを具現化するための教育課程は、3歳児から5歳児までの「自己の発達」の過

程を見通し、「自分とのかかわり」「人とのかかわり」「ものとのかかわり」という視点から、ねらいや内容を組織し、編成される。

「自分とのかかわり」は、感情表現(安定感,不安,喜怒哀楽の感情の表し等),自己発揮・自己抑制・自己調整,自他の区分(ものの区分,場の区分,時間の区分,状況の区分),遊びへの構え,向き合い方(意欲,集中力,持続力,根気強さ,向上心等)を含む内容である。「人とのかかわり」は、友達とのかかわりの状況・関係性,学級の集団としての育ち・関係性(学級集団への帰属意識,学級集団の中での存在感,学級のつながり等),教師との関係性を含む内容である。「ものとのかかわり」は、自然や社会とのかかわり,思考力の芽生え,言葉,感性と表現,生活行動等を含む内容である。

教育課程の具体例として5歳児における教育課程を表1に示した。これによると、4～5月においては、ねらいとして「興味や関心をもったことに積極的に取り組み、試したり、考えたりしようとする」があり、内容として「年長組になった喜びや自覚をもって張り切って生活する」「新入園児を迎える準備をしたり、かかわったりすることで親しみをもったり、役に立つ喜びを感じたりする」「年長組としての生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えていこうとする」などの記載がある。

## 3 保育の計画とその実際

### (1) 長期計画と短期計画

教育課程は、3年間の教育期間を見通した全体的な計画である。これを具現化し日々の保育実践につなげていくために、長期指導計画と短期指導計画が作成される。

長期指導計画は、教育課程によって発達の道筋を見通し、幼児の生活の大筋を予測しながら、月毎に育てたい方向を明確にし、ねらい・内容・環境の構成の視点を示した月別の指導計画である。この具体例として5歳児の7月における長期指導計画を表2に示した。これによると、「自分のや

表 1 5歳児の教育課程

	ねらい	内 容		
		自分とのかかわり	人とのかかわり	ものとかかわり
4月～5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>興味や関心をもったことに積極的に取り組み、試したり、考えたりしようとする。</li> <li>気の合う友達と思いを出し合いながら遊びを楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年長組になった喜びや自覚をもって張り切って生活する。</li> <li>認められたり、人の役に立ったりしている自分を嬉しく思う。</li> <li>小さい組の存在を意識し、相手に合わせて接しようとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新入園児を迎える準備をしたり、かかわったりすることで親しみをもったり、役に立つ喜びを感じたりする。</li> <li>先生や友達と相談しながら新しい生活をつくっていく。</li> <li>グループの友達と思いや考えを出し合い、話し合いをしながら活動に取り組む。</li> <li>いろいろな先生や友達とのかかわりの中で親しみをもったり、様々な刺激を受けたりして、人への興味や関心を広げようになる。</li> <li>気の合う友達とのかかわりを楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい環境に自分から働きかけて、遊びを見出だしていく。</li> <li>新しい場や遊具、用具の使い方を知り、自分達の遊びに取り入れて楽しむ。</li> <li>木登り、雲梯渡りなど様々なものに挑戦したり、体を思い切り動かしたりして遊ぶことを楽しむ。</li> <li>大型の遊具を使ってダイナミックな遊びをする楽しさを味わう。</li> <li>年長組から教わり、引き継いだことに取り組むなかで、進級の喜びや自覚を高めていく。</li> <li>年長組としての生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えていこうとする。</li> <li>当番活動の仕方を知り、意欲をもって取り組む。</li> <li>興味をもった身近な草花や生き物について、図鑑で確かめるなどしながらかかわる。</li> </ul>
6月～9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分なりのめあてをもって遊びや生活に取り組む。</li> <li>友達と思いを出し合いながら一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>がんばればできる自分への可能性を意識する。</li> <li>好きなことに集中して取り組み、満足感を味わう。</li> <li>友達の思いや気持ちを押し量り、自分を振り返りようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の姿から刺激を受けたり、教え合ったりして、少し難しいことにも挑戦しようとする。</li> <li>感じたこと、考えたことを伝え合う楽しさを味わう。</li> <li>一緒に遊んでいる友達を意識し、友達の思いに気づいて行動する。</li> <li>友達とのつながりの中で自分なりの動きをしたり、友達の動きを取り入れたりして遊びを楽しむ。</li> <li>友達と考えを出し合いながら自分達の遊びをつくっていく楽しさを味わう。</li> <li>友達と相談したり、協力したりしながら共通の目的に向かって取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近にある素材、道具、用具を使って工夫したり考えたりしながら面白いと思うことを追求する。</li> <li>進んで戸外に出て友達と身体を十分に動かして遊ぶ。</li> <li>いろいろな表現の仕方を知り、工夫して表現することを楽しむ。</li> <li>身近な小動物の生態に関心をもつ。</li> <li>友達と歌ったり踊ったり楽器遊びをしたりする中で音やリズムを合わせていく楽しさを知る。</li> <li>親子登山や運動会などの行事を通して力を合わせて、目的を達成した喜びや満足感を味わう。</li> <li>みんなと生活に必要な仕事の意味が分かって自分から気づいて取り組む。</li> </ul>
10月～3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分なりのめあてをもって、考えたり、工夫したりしながらひとつのことにじっくり取り組む。</li> <li>共通の目的に向かって友達と考え合ったり、力を合わせたりして遊びを進める充実感を味わう。</li> <li>友達とのかかわりを深め、互いに認め合いながら集団の中で自信をもって生活する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な友達とのかかわりの中で自分の新たな面に気づく。</li> <li>葛藤場面で自分に向き合い、相手を受け入れたりしながら自分の気持ちを調整していくことができるようになる。</li> <li>グループやクラスの一員としての自覚をもつ。</li> <li>自分の成長を感じ、自信をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達のよさを認めたり、考えを取り入れたりしながら遊びを進めていく。</li> <li>役割を分担し、やり遂げることで自分に自信をもつ。</li> <li>相手の言動や気持ちに合わせて自分の表しを調整する。</li> <li>互いの思いや考えを伝え合いながら仲間意識をもつ。</li> <li>小学生、中学生、教育実習生との交流を通して生活を広げていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な遊びに取り組む興味や関心を広げる。</li> <li>遊びの目的に合わせて場や物を選んで遊ぶ。</li> <li>見通しをもって状況に応じて生活を進めようとする。</li> <li>友達とのトラブルや生活の中での問題を先生や友達と一緒に考えながら解釈していこうとする。</li> <li>様々な表現に触れ、イメージを豊かにする。</li> <li>友達と様々な表現を工夫して楽しんだり、一緒に表現を創り上げていく喜びを味わったりする。</li> <li>文字や数量に関心をもち、遊びや生活を豊かにしていく。</li> <li>ルールを確かめ合ったり作ったりしてルールを共有して遊びを楽しむ。</li> <li>目的に向かって、試したり工夫したりしながら根気強く活動に取り組む、やりとげた満足感を味わう。</li> <li>身近な事象や文化を豊かに感じ、遊びや生活を進める。</li> </ul>



りたいことをするために、必要な相手との遊びを楽しむようになってきて、友達との交流が出てくる」などという当該時期の「幼児の姿」をもとに具体的な「ねらい・内容」を導き出し、「友達と思いを出し合いながら、遊びの方向を見いだしたり、自分なりのイメージの世界を広げて友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう」等が記されている。また、「環境構成・指導のポイント」として「互いにイメージを出し合い、自分の思っていることを伝え合って、自分たちなりに遊びの方向を見出していけるように支えていく。その過程で起こるトラブルでは、相手の気持ちに気付いたり、自分自身を振り返る機会として大事にしていく」などの詳細が記されている。

ただし、本園の現行教育課程と指導計画は、それぞれ編成の視点が異なっているために両者の整合性がとれていない。平成30年の幼稚園教育要領の改訂に向けて、本園の教育課程・指導計画も新

たに編成中である。

短期指導計画の一つは、日常的な指導のために、1週間単位で幼児の育ちを捉え、それに基づいて育てたい方向性、教師の願いを盛り込んだ週案である。この具体例を表3に示した。ここでは、前週「幼児の姿」から「ねらいと内容」「環境の構成と指導のポイント」を設定し、それらをもとに、1週間の日課をもって週案を記している。

さらに、週案に基づき、今日の遊びや生活の状況から明日の保育を構想する日案がある。これは各担任が日々の記録をもとに作成している。この具体例を表4と図1に示した。

これらは保育研究会にて公開、提案するために作成した詳細版である。日常的には簡易的な記載をもって作成している。また、図1は展開案であるが、同時に多様な場面や空間で活動する子どもたちの様子を俯瞰的に把握し記載することを意図した様式を用いている。

表2 5歳児の長期指導計画（7月）

<p>○ 自分やりたいことをするために、必要な相手との遊びを楽しむようになってきて、友達との交流が出てくる。いろいろな友達とのかかわりの中で、自分がより学べるという相手を見出し、自分の遊びを深めてきている。また、他者の意見に追随せず、自分の思ったことを伝えようとするようになってくる。</p> <p>○ 気の合う友達と自分なりの考えや思いを動きや言葉にしなが、共通のイメージを見出し、ごっこ遊びを楽しんだり、自分たちなりにルールをつくりながらサッカーや野球、ドッジジャンケンなどを楽しむ。反面それぞれの思いが食い違つて、トラブルになってしまうこともある。</p> <p>○ 探検ごっこのリュックサックなど、ごっこ遊びに必要なものを自分なりに工夫してそれらしく作り出して遊び出す。石鹸のクリーム作りでは、固く角の立つクリームを作ろうと繰り返し挑戦する姿が見られる。</p> <p>○ 土や砂を使ってごっこ作りを楽しんだり、草花で飾ったりする。またカタツムリなどを見つければ、保育室に持ってきて見たり触れたりすることを楽しむ。</p> <p>○ 蒸し暑くなってきて、生活行動が少しルーズになりがちところが見られる。</p>	<p>【保護者会】(2日間に分けて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 半長になってからの育ちを振り返ったり、ビデオを視聴し、テープに合わせた話し合いをするなど、保護者同士が互いの考えを聞きながら、学びあう機会をつくる。</li> <li>* 夏ならではの経験ができるように、夏休みの過ごし方について伝える。</li> </ul> <p>親子登山</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 親子登山は、父親との触れ合い、父親のすこきを見る場であること父親同士の交流の機会であることを理解してもらい、多くの父親に参加してもらえようとする。</li> </ul>	<p>ねらい・内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 友達とイメージを出し合いながら、互いに遊ぶ楽しさを味わう。</li> <li>◆ 友達と思いを出し合いながら、遊びの方向を見いだしたり、自分なりのイメージの世界を広げて友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。</li> <li>◆ 共通のイメージを見いだせるようにイメージの手配りになるような絵本や紙芝居を見たり、遊びのきっかけとなるような状況をつつていく。</li> <li>◆ 自分たちなりにこうしたいという思いやイメージ、こんなものがほしいという願いを表現できるように、教師もアイデアを提案しつつ、子どもたちと一緒に実現に向けて試みる。</li> <li>◆ 子ども達が見つけてきたカタツムリなどを飼育箱で飼うなど、身近にその生態に触れられるようにする。また図鑑などを用意して、子ども達が観察しながら不思議に思ったことなどを自分達で調べられるようにする。</li> </ul>
<p>主 な 遊 び ・ 生 活</p> <p>【友達と共通のイメージやルールを探り出して遊びを楽しむ】 ごっこ遊び(宇宙船ごっこ・おぼけ屋敷ごっこ・プラネタウムごっこ)・砂遊び(川作り)</p> <p>【興味をもったことじつくり取り組む】 シャボン玉・色水遊び・スクリュー船づくり・水車づくり</p> <p>【クラスのみんなの遊びを楽しむ】 プール遊び・ゲーム・歌・絵本</p> <p>【仕事の意味や必要さがわかり自分たちでやろうという気持ちを持つ】 大掃除、遊具洗い</p>	<p>家 庭 と の 連 携</p> <p>親子登山</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 親子登山は、父親との触れ合い、父親のすこきを見る場であること父親同士の交流の機会であることを理解してもらい、多くの父親に参加してもらえようとする。</li> </ul>	<p>環境の構成・指導のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★ 自分なりに遊びの方向を見出して、気の合った友達との遊びの楽しさや充実感が味わえるようにする。</li> <li>★ 互いにイメージを出し合い、自分思っていることを伝え合って、自分たちなりに遊びの方向を見出していけるように支えていく。その過程で起こるトラブルでは、相手の気持ちに気付いたり、自分自身を振り返る機会として大事にしていく。</li> <li>★ 共通のイメージを見いだせるようにイメージの手配りになるような絵本や紙芝居を見たり、遊びのきっかけとなるような状況をつつていく。</li> <li>★ 自分たちなりにこうしたいという思いやイメージ、こんなものがほしいという願いを表現できるように、教師もアイデアを提案しつつ、子どもたちと一緒に実現に向けて試みる。</li> <li>★ 子ども達が見つけてきたカタツムリなどを飼育箱で飼うなど、身近にその生態に触れられるようにする。また図鑑などを用意して、子ども達が観察しながら不思議に思ったことなどを自分達で調べられるようにする。</li> </ul>
<p>行 事</p> <p>七夕加賀祈詞 七夕 誕生会 なかよし集会 親子登山</p>	<p>資 料</p> <p>図 「こんべいとはおほしきさま」「おほしきさま」「七夕」「おやまにのぼれ」「やまごきん」「かえるのうた」</p> <p>課題曲 「もうじゅうがりにいこうよ」「アルプス一万尺」</p> <p>絵本 「はたけのぼろろ」</p> <p>カード 「ロンドン橋」「かみつけっしん」「マイクンボール」「ドッジジャンケン」</p> <p>絵本 「ななつのはし」「さきのはさやきや」「ぼくのなれればし」「シナの五人きょうだい」「やまのぼり」「はばばあやんのやまのぼり」「なつのはし」「宇宙ステーション」</p> <p>水とかわかる遊びが楽しめる環境</p> <p>色水づくりにかかわって(すり鉢・すりこ木・季節の花・ペットボトル・ジョウゴなど)</p> <p>石鹸クリームづくりにかかわって(ボール・泡だて器・おろし金・石鹸)</p> <p>シャボン玉にかかわって(大きなシャボン玉が作れるようなシャボン玉液の工夫・針金・毛糸など)</p> <p>ダイナミックな砂遊びができるように(脚立など水の流れるもの・ヒューマン・筒・レンガなど)</p> <p>水車づくりにかかわって(細いビニールの管・牛乳パックで作る水車など)</p>	<p>ねらい・内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分なりに課題をもち、試したり、考えたり、工夫したり、挑戦しようとする。</li> <li>◆ 身近にある素材、道具、用具などを使って、工夫したり試したり自分の興味を追求する。</li> <li>◆ 感じたことを自分なりに表現する楽しさを味わったり、友達と一緒に表現する面白さを味わう。</li> <li>◆ 自分なりにめあてをもってプール遊びを楽しむ。</li> <li>◆ 七夕の行事に関心を持ち、思いを寄せながら七夕飾りを作る。</li> </ul> <p>環境の構成・指導のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★ 暑い時期なので、水とのかかわりの中で、自分なりのイメージの実現に向けて、試したり工夫したりしながら自分と向き合うことができるような環境を用意し、課題を乗り越え、達成感が味わえるようにする。</li> <li>★ 草花や実など自然物を使って、色水を作る面白さを伝えたり、色水を使って遊ぶような環境を用意する。</li> <li>★ セットレインをすりおろし、泡だて器で泡立て、なめらかなクリームを作ったり、そのクリームをままだごのちそうづくりに生かして楽しんでいるようにする。</li> <li>★ プール遊びでは、ビニール管やアプを使って、自分なりにめあてをもって試したり、挑戦したりしながら、自分なりに「やれた」という満足感を味わえるようにする。</li> <li>★ 《七夕にかかわって》</li> <li>★ 七夕の行事に向けて、絵本や紙芝居などを通して七夕の言い伝えを知ったり、星や宇宙への興味関心を広げられるようにする。それと共に、七夕の行事に興味を持ち、思いを込めて七夕飾りなどを作るようにする。</li> <li>★ 紙染めを十分に楽しんだ後、染めた紙を用いて、貝殻やなど伝統的な七夕飾りの作り方を伝えしていく。</li> <li>★ くす玉作りは、一人1個ずつ作ることによって、自分でやり上げたという達成感が味わえるように励ましていく。</li> <li>★ 願いごとは、自分なりに努力することで、そこに近づけるようなものを子ども達から引き出すようにする。</li> <li>★ 何人かのグループで、一人ひとりが役割を果たしながら、みんなでひとつのもの(ロケットや風船)を体で表現する面白さを味わえるようにする。</li> <li>★ 親子登山に向けては、グループの友達と協力し合って、目的を達成し喜びを味わえるよう活動の場や状況を整えていく。</li> <li>★ 親子登山への期待を膨らませていくように、目的地に行く方法や目的地の様子などが具体的にイメージできるように伝えていく。</li> <li>★ グループの友達と相談して、図柄を考えたり、協力して旗を作る。</li> <li>★ ワッペン作りは、いっしょに行く保護者を思い浮かべながら、思いを込めてデザインしたり描いたりできるようにする。</li> <li>★ 登山の当日は、グループごとに課題をクリアしながら、協力し合ってゴールを目指せるように励まし、やり上げた満足感を味わえるようにする。</li> <li>★ 親子登山には、全教職員が参加し、安全で一人ひとりに応じたサポートができるように配慮する。</li> </ul> <p>ねらい・内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 暑さに応じた生活をしようとする。</li> <li>★ プール遊びが入ることで、生活の流れが、その日によって変わることで、予定を見ながらの遊びを進めたり、その日の生活の流れに合わせて臨機応変に生活行動を取れるようにしていく。</li> <li>◆ 生活の流れに応じた行動を意図してやるようにする。</li> <li>★ 夏休み前には、自分の道具入れを片付けたり、遊具の整理整頓をしたり、保育室の雑巾がけをする。</li> </ul>



(2) 週案の実際

週案では、前週の幼児の姿を踏まえながら、今週の遊びや生活の全体の流れを見通し、環境や教師のかかわりについて構想する。これらの計画は実際の姿に照らし合わせながら修正し、より幼児の実態に即した保育の見通しが持てるようにする。ここでは、5歳児7月1週目(前出の表3)の週案を元に、幼児の実態を踏まえ、育ちを見通しながら、ねらいや内容をどのように設定し、豊かな遊びを育むための環境の構成や援助をどのように導き出すかについて、「人とのかかわり」の1つ目の○を例に説明する。

「幼児の姿」の欄には、「○自分なりにやりたいことに意欲的に取り組み、充実感や満足感を得ている。一方で、なかなかじっくりと取り組めるような状況でなかったりどこか不安げだったりする子もいる」とある。このように捉えた根拠は、次の「・」に示された①児の遊びを転々とする姿や③児の葛藤する姿である。このような幼児の実態

時刻	幼児の活動	環境の構成と教師の配慮・援助
8:45	○登園する ・朝の挨拶をする ・所持品の始末をする ・当番活動をする	・挨拶をしながら話をしたり、スキンシップをとったりする。何気ないおしゃべりを通して、子どもの思いや家庭での体験などを感じ取り、子どもと心を繋いでいたりにする。 ・友達とふれあう姿を大切にしながらも、所持品の始末等、やるべきことを意識してやるように促す。 ・互いに声を掛け合い、思いを込めて小島当番や花当番に取り組みするように促す。
	○友達と互いに思いやイメージを伝え合い、受け止めあひながら、共通のイメージを見出し遊びをする。 ○自分なりにこうしたいという思いをもち、試したり、考えたり、工夫したり、挑戦したりしようとする。	・いつも違う状況に遊び出せない、気持ちが高ぶる等あるだろう。前日までの遊びを想起するようなことを話題にしたり、環境を用意しておいたりする。 *詳細は展開案参照
11:00	○片付け ○手洗い、うがい、用便などをする。	・教師も一緒に片付けをしながら、片付け方も伝え、自分で選んだ所は自分で片付けられるように促す。 ・「自分たちでできるよ」「みんなであらう」という気持ちを大切に。きげんよく進めることも意識させていきたい。 ・手洗い、うがい等をしながら次の活動に期待がもてるような状況をつくる。待っている間も楽しい雰囲気や遊びを促すようにする。生活行動は、自分から進んで取り組もうとするよう働きかけていく。
11:30	○「七夕ショー」の表現をする。	・ストーリーや音楽の雰囲気を感じながら、グループの友達と力を合わせて考えたり表現したりすることを楽しくするようにする。 ・互いの動きに刺激を受けたり取り込んだりしながら、表現の幅を広げていくようにする。
12:00	○お弁当を食べる。 ○七夕飾りを作る。七夕の雰囲気を味わう。	・食事のマナーを意識しつつ、友達との食事を楽しめるようにする。 ・食後は、飾りを作ったり、願い事を思ったりして、七夕の雰囲気を味わえるようにする。
13:30	○降園準備をする。	・棚の上や中の物も含め、持ち帰る物を自分なりに確かめながら降園準備ができるように働きかける。 ・翌日の登園に期待感をもてるようにする。
13:40	○降園する。	・みんな気持ちよくあいさつできるようにする。

平成28年7月7日(木) 5歳児き組 展開案

担任 北條 早織

**出探しをする、自然物を使ってごちそうづくりをする**  
(⑤児、①児、④児等)

- ⑤児、ダンゴムシやカタツムリなど虫に興味をもっているため、その動きに合わせて、①児、④児も一緒に虫探しをする。昨日作った虫の造形を更に工夫したり、虫とのかかわりを楽しんだりする。
- 昨日の遊びを思い出し、土や草花、木の葉や枝などを使ってごちそうを作ったり、色水を作ったりして、ままごとやお宿屋さんなどのイメージを楽しむ。
- 虫は興味をもっているのにこれに共感しつつ、捕まえるだけでなく、環境を整えてお世話をして大切にしているように促す。
- 泥を混ぜているだけになっていることあるため、こだわって作っていく面白さを味わえるように、教師がやってみせたり、材料の提案をするなどして、アイデアを提案する。
- 教師も一緒に動きながら、拠点となる場でじっくりと遊ぶような状況作りをする。

**音楽に合わせた表現(楽器や踊り等)をする**  
(9児、10児、7児、3児、②児、⑥児、⑧児、①児、④児、③児、⑤児等)

- 9児、10児、7児、3児は、音楽に合わせて楽器を鳴らすことを楽しむ。音楽の雰囲気やリズム等に合わせた楽器や演奏の仕方を覚えるなど、感性を研ぎ澄まして表現していく。これまで使ってきた楽器に加えて別の楽器も使って、以前のような勢いではなくなってきたところもあるが、女児たちも興味を持ち動き出す。
- ②児、⑥児、⑧児、①児、④児、③児は、踊りを楽しむ。一人一人から湧き出て来たものをどんどん表現していくこともあれば、どんな風に踊るか相談しながら進んでいくことも多い。相談の過程で思いがけずつながりあっていたりすることもある。③児の思いが強く、他の子が思いを出せずにいて、遊びが停滞してしまうこともある。
- OHPで背景を映し出した時、踊りながら楽器を鳴らしたりと、表現の幅も徐々に広がっていく。
- 楽器は以前のように鳴らなくなってきた。楽器を増やすなど工夫することでまた楽しさが増えるようにする。OHPでの表現なども興味をもっているため、他の表現などもしながら幅広く楽しんでいることも視野に入れて援助する。7児や10児は、ここに友達とかかわっていることで自信をもつことができたり充実感を得たりしていることで、支えていく。
- やりたいという思いが湧くように、場の保護や使える楽器、手具、衣装、様々な音楽等の用意、提案などを促す。
- 音楽が聞こえないと思わず楽器を鳴らしたり、踊り出したくなるようなところがあるため、楽しい気分を盛り上げ、自分たちなりの表現を楽しめるように促す。
- 思いが湧く場面ではやりとりを見守る。自分達だけで解決が難しい時は、一人一人が自分の思いを伝えられるように促す。教師がそれぞれの思いを受け止めることで、安心して相手のことに耳を傾けたり、考えを合わせてよりよいものにしていくように仲立ちしていく。③児は思いを強く出すが、それだけこうしたいという思いが強くあつたり色々なアイデアが湧いて来たりというときもあるため、そこは他の子にも受け止めてもらえるようにしたい。
- ⑧児は体の不調を訴えて、教師とのかかわりを求めて来ることがある。ひと時教師とゆっくりかかわることで安心できるようにする。
- 明日の七夕ショーが意欲となっていくだろう。明日の動きを意欲して表現が継続されていくように促す。

**自分のイメージするものを製作する、七夕飾りを作る**  
(⑧児、⑥児、⑤児、⑦児、11児、③児等)

- おしゃれなアイテムや武器など遊びに必要なもの、七夕飾りなどを、それぞれにイメージやこだわりをもって作る。おしゃべりなどの中で互いのイメージが伝わって、自分の中に取り込んだりよりイメージを膨らませていたりする。製作がきつかけとなく、一緒に動き出すこともある。
- それぞれにこんな風になりたいと思うものを自分なりに実行し続けながら作っていくと思わせるので、基本的には見守り、やっていることよきき気付けるようにする。必要に応じてより豊かな表現になっていくように、素材やアイデアを提案する。作ったものが現実に生きていくように、おしゃべりを通してイメージを膨らませられるように促す。
- 七夕当日なので、そのことを話題にしながら思いを込めて七夕飾りを作れるようにする。くす玉は針を使うので安全に気を付けて使えるように声をかける。

**固定道具に挑戦する、そこで鬼ごっこをする**  
(2児、6児、8児、3児、1児等)

- 「こんなこともできるよ」「もっとすごいことができるよ」のように思いやイメージを伝えるようにする。イメージがあることでより楽しくなることもあるが、必要に応じて教師から援助がけしていく。特に、他にやりたいことを見出しそれにこだわっていることある場合もあれば、何を楽しんでいるのか、求めていること何かを捉えたり工夫したりして遊べる面白さがわかるような状況を作っていく。
- 雨の降る場合など、ホールで巧技台等を構築して鬼ごっこをする。

**砂遊び、水遊びをする**  
(3児、6児、8児等)

- 穴を掘って宝探しをしたり、水路を作ったり水を流したりすることを楽しむ。互いにやりとりしながらイメージを広げていく。虫が近くにいたりすると、それらに気持ちは向けていく。
- やつことを認めながら、遊びがより楽しくなっていくようにおしゃべりの中でイメージを膨らませたり、一緒に動きながら様々な道具を生かして工夫したりできるように促す。

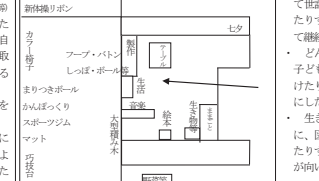
**電車・ジェットコースター(ボール車)を使って遊ぶ**  
(4児、5児)

- 一緒にいることに面白さを感じながら、段ボールの電車を動かしたり乗ったりすることを楽しむ。(室内・園庭どちらの可能性もある) 昨日の流しから、巧技台でコースを構築していくこともある。それぞれのイメージを言葉や動きにしていくことで、様々なイメージを共にしながら遊びを進めていく。なかなかイメージが広がらず停滞してしまうこともある。
- まだ園庭が暖かまっているところもあり、やりとりがけられ違っているところもあるが、一人一人は「こうしたい」というアイデアを言葉にしているため、教師が仲間一人としてかかわり、構築することによってイメージを線や点に共有し膨らませているように促す。
- 電車を動かすことに興味し、なかなかイメージが広がらないような時は、楽しんでることを受け止めつつも、線路を描いたり、駅等を作ったり、路線図や看板を作ったり等、工夫したり、イメージを膨らませたりして、遊びがより楽しくなっていくように援助する。外の場合は構設が難しいところがあるため、サッカーボールやトンネル、シート等も使い、どんな工夫ができるか、教師も仲間一人としてかかわりながら、構成の仕方等のアイデアも子どもたちと一緒に考えていきたい。

**生き物にかかわる**  
(1児、8児、6児、9児、3児、⑤児、①児等)

- 学級やそれぞれに作っている生き物(カタツムリ、ザリガニ、様々な虫等)に顔をあわせて世話をしたり、虫眼鏡で観察したり、触れ合ったりする。飼っているもの、すっかり忘れていて継続して世話をしないこともある。
- どんなことに興味を持っているのかを見守り、子どもの様子などを拾って、必要に応じて声をかけたりする。気付けや生き物を使う気持ちを大切にしたい。
- 生き物にとってよりよい環境を整えられるように、園庭を見て調べたり、友達から教えてもらったように促す。自分で飼っているもの意識が湧いていような時は、世話を促すように促す。

**七夕飾り作り**



七夕飾り作り環境構成図: 七夕飾り作り用の環境構成。フープ、バトン、しぼり、ボール車、まりつきボール、かんぱんくり、スポーツジム、マット、カラフルな紙、水、砂、土、草花、木の葉、枝、ダンゴムシ、カタツムリ、お宿屋さん、ごちそう、七夕飾り、願い事、手具、衣装、音楽等が配置されている。

図1 展開案



を踏まえ、「自分に自信をもち、興味をもったことにじっくりと取り組む」という「ねらい」や「自分なりに興味をもったり、めあてをもったりして、じっくりと取り組む」等の「内容」を設定している。さらに、この「ねらい」に近づくための具体策としての「環境の構成と指導のポイント」には、「一人一人の心の揺れ動きに寄り添い、安心して過ごせるようにする」「一人一人の様々なよさを受け止め、言葉にして伝え、自信をもてるようにする」等を挙げている。

### (3) 日案の実際

日案は、前日の遊びや生活から構想した本日の遊びや生活の見通しや保育の意図をより具体的に示したものである。週案（前出の表3）での見通しのもとに、作成したのが日案（前出の表4）である。両者を関連づけながら、日案に記述されている「幼児の姿」の捉えと豊かな遊びを育むための「環境の構成と援助」の関係を説明する。

「幼児の姿」には、人とのかかわりの実態として「関係が広がり、学級や学年の多様な友達とのかかわりも見られ、互いによい刺激となっている。一方で、友達を頼って過ごしていて自分の思いがあまり感じられなかったり、なかなか友達とのかかわりを見出せずにいたり、関係が日替わりだったりする状況もある」等と記されている。

このような実態を踏まえ、「ねらい」を「友達と互いに思いやイメージを伝え合い、受け止めあいながら、共通のイメージを見出して遊ぼうとする」と設定している。

「指導のポイント」には、「7児や⑥児、⑤児、③児などは不安や甘えたい思い、葛藤などもあるようだ。一人一人の心の揺れ動きに寄り添い安心感がもてるようにすると共に、一人一人のよさを受け止め、言葉にして伝え、自信をもてるようにする」「音楽に合わせて表現して遊んでいる子たち（③児、②児、⑥児、①児、⑧児、④児、⑨児等）のところでは、友達の中で自分の思いやイメージを伝えたり、相手の思いを受け止め合うことで、より遊びが楽しくなっていくような体験を重ねていきたい」等、この日重点的に指導したい幼児や

遊びについて、援助の具体を示している。③児の姿については週案にも記述されているが、③児を含む仲間の遊びに重点的にかかわることで、③児の育ちのみならず、そのメンバーの関係性や遊びの質を高めたいという教師の意図がうかがえる。

さらに、前日の遊びの状況から予想されるより具体的な遊びの姿とそれに対する環境の構成や援助のポイントは、「展開案」（前出の図1）に示している。

展開案は、学級全体の予想される遊びの姿を環境図として示したものである。この環境図による展開案を作成することで、同時に多様な場面や空間で展開される幼児の遊びを俯瞰的に把握することができる。これにより、教師はねらいや指導のポイントに照らし合わせながら、優先順位をつけて援助する。

「指導のポイント」に「音楽に合わせて表現して遊んでいる子たち（③児、②児、⑥児、①児、⑧児、④児、⑨児等）のところでは一」と重点的にかかわる対象を明記している。その上で、展開案では、「やりたいという思いが叶うように、場の保障や使える楽器、手具、衣装、様々な音楽、等の用意、提案などをする」「音楽が聞こえると思わず楽器を鳴らしたり、踊り出したくなるようなところがあるので、楽しい気分を盛り上げ、自分たちなりの表現を楽しめるようにする」「思いがぶつかる場面ではやりとりを見守る。自分達だけで解決が難しい時には、一人一人が自分の思いを伝えられるように促す。教師がそれぞれの思いを受け止めることで、安心して相手のことにも耳を傾けたり、考えを合わせてよりよいものにしていけるように仲立ちしていく」「③児は思いを強く出すが、それだけこうしたいという思いが強かったり色々なアイデアが湧いてくるというよさもあるので、そこは他の子にも受け止めてもらえるようにしたい」というように、より具体的な環境や援助の方向性が示されている。

このように、教師は予想される遊びを的確に捉え、より具体的な手立てを導き出すとともに、変化していく幼児の遊びの状況や志向性を見極めな



がら、柔軟にかつ臨機応変に環境を再構成し続ける。このことなしには、豊かな遊びを育むことはできない。

豊かな遊びを育むためには、幼児の内面や遊びの状況を深く理解し、それらを元に保育を構想し、指導の計画を作成する必要がある。そのためには、指導計画作成の根拠となる的確な幼児理解が求められる。それは、日々の保育記録及び保育の評価によって可能となる。

### 4 保育の評価とその実際

保育における評価とは、幼児の発達する姿を捉えることと、それに照らし合わせて教師の指導が適切であったかどうかを評価することの両面を指す。保育の評価の手掛かりとして、本園で大切にしていることは、保育の記録をとることと、複数の教師の目で多面的に幼児を理解することである<sup>9)</sup>。その上で本園では、次の三つの方法によって保育の評価を実施している。

#### (1) 記録を通して

幼児の発達する姿を捉えるためには、日々の生活する姿、遊びに取り組む姿から、内面や体験していることを丁寧に読み取る必要がある。保育後に一日の保育を振り返りながら記録する方法として、本園では主として環境図記録の方法を用いている。これを図2に示した。この様式は、日案の展開案(前出の図1)と同じ様式であり、記録が評価と計画に直結しやすい。また、学級全体の遊びの状況を俯瞰的に把握し記述することがしやすい。そもそも教師には、保育の全体の状況を捉えつつ、幼児一人一人の内面や遊びの状況に目を配るという多面的な状況理解が求められる。多様な場で、同時進行的に展開されるいくつもの遊びや何人もの幼児の状況をしっかり理解するためにも、環境図記録を取り続け、長期的な視野からも幼児の発達や変化を捉える必要がある。

#### (2) 保育カンファレンスを通して

保育カンファレンスは、教師同士が多様な見方

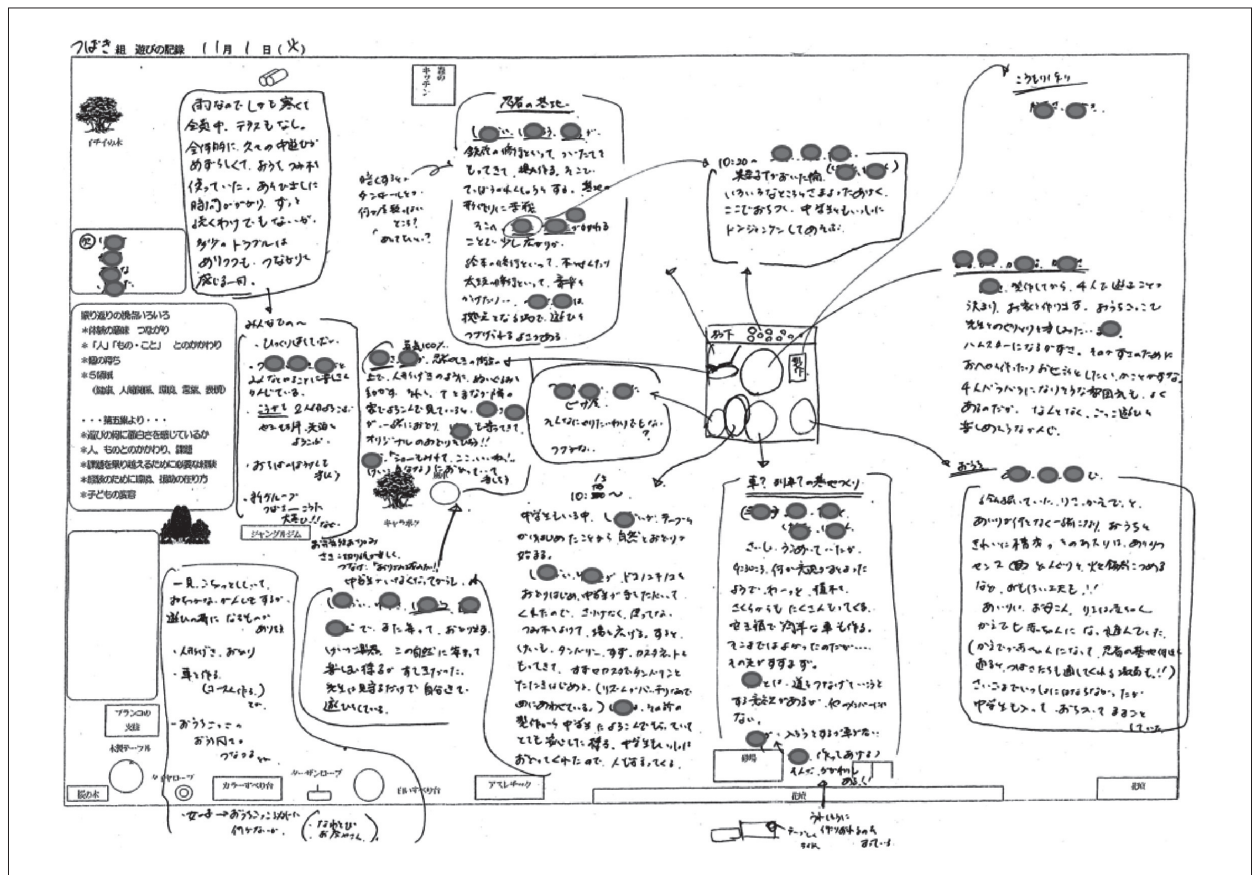


図2 環境図記録

を突き合わせながら、自分の見方・捉え方のくせを自覚したり、幼児理解の幅を広げたり深めたりして、適切な保育の評価につなげていくためのものである。

本園では、学年会、事例検討会、研究保育等、多様な場でカンファレンスを行っている。

カンファレンスでは、進行役がその日の話し合いのテーマを提示し、それに基づき話し合う。その日のテーマによって、5人程度のグループになることも、全員で話し合うこともある。グループで話し合う場合は、さらに各グループの進行役を決め、場合によっては、各自の意見を付箋に記し分類・整理する方法もとっている。

カンファレンスにおいて重要なのは、自分を開き、語り合い、学び合うような教師同士の関係性である。そのためにも、保育後に職員室でお茶を飲んだり、掃除をしたりという日常の何気ない場面の中でも、子どもや保育について話題にしながら、保育の本質が共有されるような風土をつくりだし、同僚性を高めていくよう努めている。

### (3) 研究保育を通して

本園では、各学級年1回ずつ研究保育（事前研究会、研究保育、事後研究会）を行っている。事前研究会で、研究テーマや学級の課題によって対象とする遊びや幼児を決め、研究保育の際には、それぞれが対象場面を時系列に沿って記録（書く、写真やビデオに撮る）する。事後研究会では、それぞれの記録をもとに、対象学級の保育を振り返り、子どもの体験の意味、環境や援助の成果や改善について掘り下げる。

7月7日の研究保育（事例研究会）を例として、保育の評価の実際を説明する。ここでは、担任が捉えた最近の幼児の遊びの姿として次の内容が報告された。

女児数人が、日頃クラス全体での活動で楽しんでるダンスに、時にリボンを持ったり、ときに布をまとったり、自分たちなりに動きを工夫したりして楽しんでいる。そこに、“ごみ箱ドラム”をたたくことにハマった男児が

勢いのある音を響かせたことから、ここ1週間ほどは、男児のドラムと女児のダンスのコラボで盛り上がっている。七夕近くになり、七夕飾りを作ったり、笹竹に飾りをかざったりするうちに、ある子の「七夕飾りの下でやったらいいんじゃない」という意見に、「そうだ、七夕ショーをしようよ」と、子どもたちの気分が盛り上がり、七夕まつりで、“七夕ショーをやろう”という共通の目的が生まれている。

引き続き、担任による保育の自評が報告された。

- ・音楽に合わせて七夕ショーに向けての活動をしようとしていた子どもたちは、伝え合い、受け止め合いがなかなか上手くいかなかったが、③児が悪者にならないようにしたいと考えた。
- ・たいこのメンバーがトーンダウン気味であったが、踊りの女児たちに、一緒にやろうと声をかけられると、満更でもない表情をしていた。女児たちは、仲間の男児を呼びたい。外まで呼びに行っては、またホールに戻るを繰り返していたが、なかなか始まらなかった。
- ・踊りの女児は、リボンの色をどうするかで意見が分かれた。それに対して互いに相手の選んだ色をダメと言っただけだったが、なぜそうしたいのかということ聞き合うことが大事だと感じた。
- ・たいこを始めとした楽器のメンバーは、ショーへの気持ちが入っていなかった。「楽器はイマイチだった」という言葉からも、満足感が味わえなかったことがうかがえる。
- ・学級全体で、七夕に向けての踊りをした際は、明日への意欲が湧きあがってきていた。

参観者の一人から、次のような参観記録が提供された。実際の場面では、協議の中で複数の参観者からトピックとして随時提供される。

「明日が“七夕ショー”本番！」と、登園

してきた女兒は、次々ステージにやってきては、それぞれに準備を始めた。皆、一様に背中に衣装となる布をつけようとする。布は安全ピンで止めなければならないが、教師を頼ることなく、友達同士、相手の背中に布をつけ合っている。また、誰かが「つけてちょうだい」と言うと、それに気づいて、さっと友達が近寄りやってあげるという関係ができていく。

しかし、衣装を身につけたものの、なかなか“七夕ショー”に向けた活動は始まらない。ドラム担当の男児の気持ちが向かず、外に行ってしまったようだ。女兒たちは、「○くんたち、外に行ったよ。」「呼んでこよう!」「○ちゃんも呼びが呼びに行ったけど、私たちも行かなきゃ!」など、口々に言うと外へと向かった。その際、急いで靴を履き替え行っただけ、テラスには靴が散乱していた。すると、仲間の一人が、「靴がバラバラになっている」とそつとつぶやきながら、中靴をそろえ始めた。その行為のさりげない姿に感心しながら見ていると、靴をそろえ始めた子の行為に気づいて、もう一人の子と一緒に靴をそろえ始めた。場面に応じた生活行動が身についている。

その後も、“七夕ショー”をやりたいという思いはあるものの、それぞれの思いがすれ違いトラブルになったり、様々なハプニングがあったりで、“七夕ショー”への取り組みが始まったのは、登園から1時間以上も経っていた。しかし、どうしたらメンバーの誰一人その場から抜けることなく、みんなで七夕ショーができるかをそれぞれが自分のこととして、思いや考えを伝え合う場面が随所にみられた。

このような情報をもとにカンファレンスを展開し、次のように幼児の体験や学びを読み取り評価する。

- ・「登園してきた女兒は、次々ステージにやってきては、それぞれに準備を始めた」という記述からは、遊びへの興味関心や強い意欲【学びに向かう力・人間性】が読み取れる。
- ・「布は安全ピンで止めなければならないが、教師を頼ることなく、友達同士、相手の背中に布をつけ合っている」からは、安全ピンを止める微細な身体技能の基礎が獲得【知識・技能の基礎】されていることがうかがえる。また、教師を頼ることなく友達同士で相手の布を付け合っている姿からは、相手の状況を感じ取る思いやりや協力し合う関係性の育ち【学びに向かう力・人間性】が読み取れる。
- ・「女兒たちは、『○くんたち、外に行ったよ』『呼んでこよう!』『○ちゃんも呼びが呼びに行ったけど、私たちも行かなきゃ!』など、口々に言うと外へと向かった」という記述からは、これまで一緒に取り組んできた仲間と一緒に活動を楽しみたい【学びに向かう力・人間性】という強い思いが感じられる。
- ・「一人が『靴がバラバラになっている』とそつとつぶやきながら、中靴をそろえ始めた。その行為のさりげない姿に感心しながら見ていると、靴をそろえ始めた子の行為に気づいて、もう一人の子と一緒に靴をそろえ始めた」の記述からは、脱いだ靴をそろえるという、基本的な生活習慣が獲得されている【知識・技能の基礎】ことが読み取れる。
- ・「“七夕ショー”への取り組みが始まったのは、登園から1時間以上も経っていた。しかし、メンバーの誰一人その場から抜けることなく、どうしたら、みんなで七夕ショーができるかをそれぞれが自分のこととして、思いや考えを伝え合う場面が随所にみられた」とあるが、“七夕ショー”が始まるまでに、登園から1時間以上もの間遊びへのモチベーションを保ち、やり続けようという気持ちがうかがえると共に【学びに向かう力、人間性等】、どうしたらみんなでショーができるかを考えたり、話し合ったり、新しい考え生み出したり



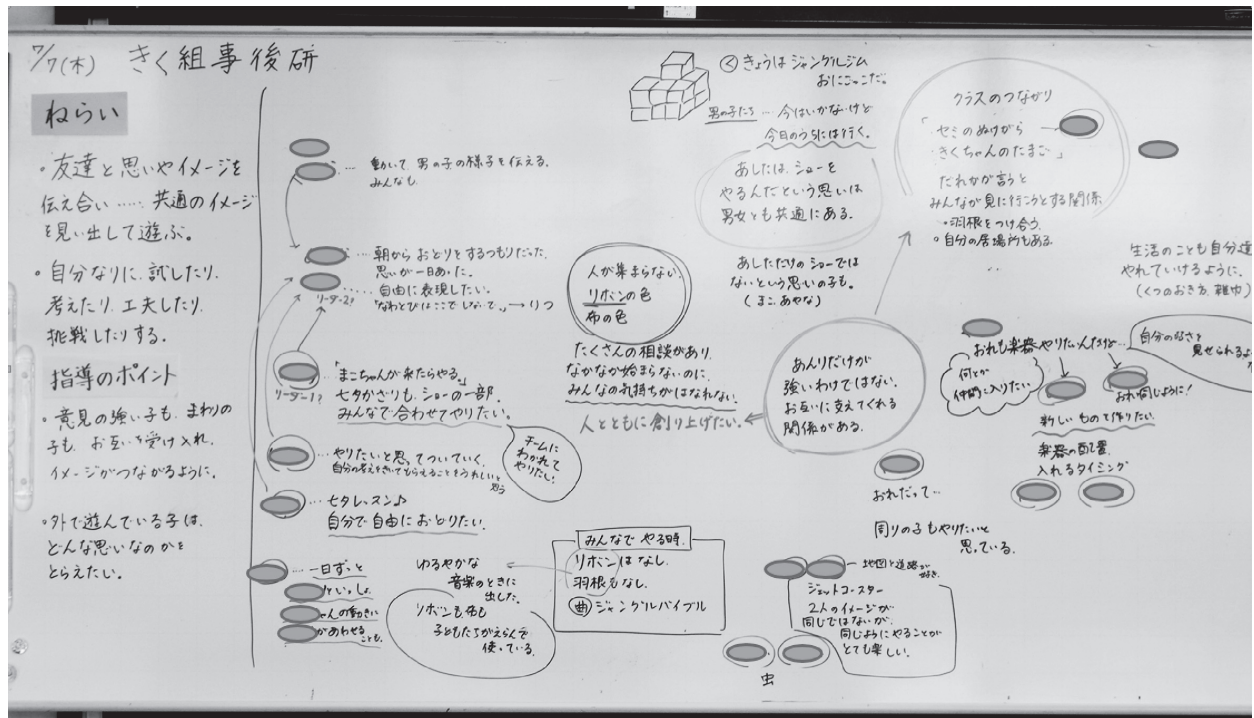


図3 カンファレンスの記録(ホワイトボードへの板書)

している【思考力・判断力・表現力等の基礎】  
が読み取れる。

が自然に出てきている。

また、カンファレンスを通しては、次のようなことが話し合われた。このようなカンファレンスの内容は即時的にホワイトボードにて記載され、共有される。これを図3に示した。

このように観察者の記録やカンファレンスを通して、複数の教師の目で幼児の発達や学びを読み取ることで幼児理解や教師の援助について、適切な評価ができるようにしている。

- ・③児は、明日の七夕ショーに向けて、やりたいという思いが強くあった。②児の登園を待っていた。
- ・③児には、抜群の面白さがある。しかし、言い方には課題がある。
- ・担任は、男児の楽器がトーンダウン気味と言っていたが、1児は、友達に「楽器をやりたい」と打ち明けていた。自分から楽器の場にやってくると、自らやらせると頼んでいた。
- ・様々な場面でもめることもあったが、それぞれが遊びのイメージもち、やりたいと思ことがやれている。
- ・友達とかかわる楽しさを味わい、お互いのやりとりがおだやか。「ごめんね」「ありがとう」

### 第3章 まとめ

本園では、豊かな遊びから、確かな学びへとつながっていく保育の充実を目指し、日々の保育実践の省察や研究保育等のカンファレンスを通して、絶え間ない保育の改善に努めている。それは、幼児が環境にかかわって生み出す自発活動としての遊びを重視し、遊びの姿から体験の意味を読み取り、遊びの質が高まるような環境構成や援助の在り方を探る保育実践の質的な追究である。

質の高い幼児教育とは、多様な環境とのかかわりの中で、幼児自身が体験をつながげながら主体的に活動し、遊びの充実感を味わったり、学びを深めたりしていくものであり、そのプロセスの中で



いわゆる非認知能力が身についたり、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」が育まれていくものである。それをめざす際に、次の二つの課題についても留意したい。

一つ目は、幼小接続である。幼児教育においては、豊かな遊びや園生活の全体を通して、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情・意欲・態度など、5領域のねらい及び内容に即して指導する中で、思考力・表現力、主体的な生活態度などを育成し、小学校以降の学習の基盤とされる。幼児期に育みたい資質・能力を育て、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿である「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10項目につなげていくことが求められている。当然ながら幼小接続では、子どもの発達や学びの連続性を踏まえる必要がある。

二つ目は、特別支援教育である。個々の発達に応じた幼児教育においては特別支援教育の大部分は包括されている。すなわち幼児教育では、一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うことが基本となっており、それを大切にしているためである。一人一人の幼児の様々な特性や状況を深く理解し、それぞれの状況に対応した細やかな配慮により、全ての幼児の指導の充実につなげていくというユニバーサルデザインの発想は、特別支援教育の充実とも確かに重なるだろう。また、幼児期においては発達障害等に関する見極めがしにくい時期でもある。本園では一人一人の幼児の姿を丁寧に見取りながら幼児との信頼関係を築くとともに、一人一人の発達の課題を受け止め、発達の過程に寄り添いながら、その子にとってふさわしい環境を整え、自己の育ちを促すということを大事にしてきた<sup>10)</sup>。複数の教員で連携し合いながらチーム保育を実践するとともに、日常的に一人一人の遊びの状況や育ちについて全教

職員で、情報交換し合いながら対象児への理解を深め、保育に取り組んでいきたい。また、大学の附属であることのメリットを生かし、必要に応じて特別支援教育の専門家や附属特別支援学校との連携しながら保護者の心情へも配慮しつつ、幼児のよりよい育ちにつなげていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆、公開に際してご理解ご協力をいただいた皆様に記して感謝申し上げます。なお、文中表記に際しては研究倫理に十分配慮いたしました。

## <引用文献>

- 1) 文部科学省 (1998) : 幼稚園教育要領.
- 2) 文部科学省 (2008) : 幼稚園教育要領解説.
- 3) 中央教育審議会 (2016) : 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について (平成28年12月21日中央教育審議会答申), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2017.2.28. 閲覧).
- 4) 内閣府子ども子育て本部 (2017) : 子ども・子育て支援新制度について, <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/index.html#gaiyo> (2017.2.28. 閲覧).
- 5) 前掲3)
- 6) 前掲1)
- 7) 前掲2)
- 8) 前掲3)
- 9) 文部科学省 (2010) : 幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価. 株式会社ぎょうせい.
- 10) 下山恵 (2017) : 保育の基本はユニバーサルデザイン. 特別支援教育研究, 714, 10-12.